
ネギま！太陽の戦士

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！太陽の戦士

【Nコード】

N0215Y

【作者名】

葉月

【あらすじ】

一 神奈川県川崎市で繰り広げられる壮絶な善と悪の戦いー
天体戦士サンレッドと、悪の組織フロシャイム川崎支部ヴァンプ将軍。

幾たびの激闘により築かれた、友好的な敵対関係（ヴァンプ談）
そんな二人が、バイクでツーリング中に謎の発光現象が！
二人が目覚めるとそこは神奈川県川崎市ではなく埼玉県麻帆良市
！？

常に全力を出すことが出来なかったヒーローは、己が力を存分に振るい、白き翼を照らす太陽となる！

天体戦士サンレッドと魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。

苦手な方はお気をつけください。

処女作ですので拙く、誤字脱字も多いと思いますが、よろしければ見てやってくださいませ。

プロローグ（前書き）

初めまして！

皆さんの小説読んで触発されて、勢いのまま書いた駄文。処女作品ですので至らないことが多々あると思います。

それでも駄文なりにがんばっていきたいとおもいます！

よろしく願います！

プロローグ

神奈川県川崎市のとあるマンション

ピーンポーン・・・

「おーい、かよ子ー？誰か来たぞー？」

リビングで寝転がってテレビを見ている男性は動こうとはしない。

「はーい！」

奥から呼ばれた女性・・・かよ子が応対の為、玄関に向かう。

戻って来たかよ子と来客の話し声。

「いつも助かります。ヴァンプさん。」

「いいのいいの、気にしないで！たくさん作ったほうが美味しいからね、お料理は。」

来客は、おすそ分けを持って現れたヴァンプ將軍。

言動はただの主夫だが、それでも世界征服を企む悪の組織フロシャイムの幹部である。

「まあ、たお前かよ、ヴァンプ。ホント、気軽に来るよなお前は・・・。」

「ちょっとアンタッ！折角おすそ分け持ってきてくれたヴァンプさんにまたそんなこと言って！」

「まあまあ、かよ子さん。レッドさんも本気じゃありませんよ。ね？レッドさん。」

「勝手に言ってる！」

この悪態ついてる男性こそ・・・、天体戦士サンレッド。
神奈川県川崎市で日夜、世界征服を企む悪の組織フロシャイムと戦
い続けるヒーローなのだ!!

たとえ働きもせず、彼女のかよ子に養われていると○であっても！
そう！○モであつても！ヒーローなのだ!!

たとえ悪の組織の幹部がおすそ分けに来るほど近所付き合いがあ
ろうとも！ヒーローなのだ!!

かよ子とヴァンプが世間話で盛り上がってからしばらくすると、再
び来客を告げるチャイムが鳴った。

ピンポーン・・・

「あ、今度こそ来たかも！」
嬉しそうに玄関に向かうかよ子。

「何が来たんだよ？」
「？」

一方、訳が判らないレッドとヴァンプ。

しばらくしてかよ子が戻ってきた。しかも満面の笑みで。
ますます訳の判らない二人。

「うふふ、二人とも着いてらっしゃい♪」
「「？」」

かよ子に促され、外に出てきた二人の目の前にあったのは一台の赤
を基調としたレーサータイプのバイクだった。

「お前っ！これっ！どーしたんだよ！？」
動揺するレッド。

それもその筈。

このバイクは以前、金に困ったレッドが中古屋に売りに出したヒーロー用バイクだった。

「アイツら（フロシャイム）相手に必要ねーから。」とはレッドの言葉。

「ふふっ、中古屋さんに出てたから買ったのよ。アンタにプレゼントしたげようと思って。」

「凄いじゃないですか！レッドさん！」

ヴァンプとしては、ヒーローらしく対決に登場したりしてくれるのでは？

と、期待が高まるばかりである。

正直、かなり望みは薄いのだが・・・。

「アンタ、ヒーローなんだから、乗り物のひとつでも持っていないと格好つかないでしょ？」

「そうですよ。ささ！早速乗ってみせてくださいよお。」

「・・・なんでテメエに見せなきゃなんないんだよ・・・。」

「別にいいじゃないの。アンタ、前にヴァンプさんの新品の自転車失くしてるじゃない。お詫びに後ろに乗せてあげてもいいくらいよ？」

かよ子の言うとおりのレッドは以前、ヴァンプの電動式自転車を紛失したことがあるので（翌日に取り戻したが）それを言われると負い目も相まって、強く出れない。

「・・・ちっ、わかったよ！後ろに乗つけてやりゃいいんだろ！乗

っけりゃ!」

本当はかよ子に乗せてやりたかったレッド。

しかし当の本人から言われてしまったのだから、もうヤケクソである。

「おら、来いよヴァンプ!」

レッドとしては慣らし運転も兼ねて借りも返して、さっさと終わらせてしまいたい。

と、気持ちを切り替え、久しぶりのバイクに跨った。

「えゝ、悪いですよゝ。」／／／

口では遠慮してるものの、興味深々のヴァンプ。

「いいから早く来いってんだっ!」

「ひいっ!! すぐ乗りますゝ!!」

慌てて後ろに乗り込むヴァンプ。

「気をつけていってらっしゃい。あんまり危ない運転しちやダメよ?」

「おゝ、わかってるって。じゃ、いってくるわ。」

「いってきます、かよ子さん。」

レッドがバイクを起動させる。

持ち主の所に帰って来た、ヒーロー用のモンスターマシンが喜びを表すかの如く唸りをあげる。

ヴオオオオオオンッ!! オオオンッ!!

颯爽と去っていくレッド達。

「プレゼントしてよかったわ♪あんなに嬉しそうにしちゃって♪」
ご機嫌なかよ子であった。

ギヤオオオオオツツ・・・！！！！

颯爽と風を切る一台のバイク。言うまでも無くレッド達である。
既に法定速度なんて無視である。

「ち、ちよつと、レッドさん！？」

「♪♪♪」

鼻歌交じりで反応がない。ご機嫌である。

「レ、レッドさん！？レッドさん！？」

「♪・・・ちっ、んだよ？ヴァンプ。」

「慣らし運転じゃないんですか！？」

初めてのバイク、初めてのスピードにヴァンプはもう楽しむ余裕な
んがなく、恐怖でいっぱいである。

「スピード出さなきゃ楽しくねえじゃねーかよ。」

そう言いながら更にスピードをあげるレッド。

「ひいひい！・・・ん？」

スピード計を見ようと覗き込むと、ハンドル中央にチカチカと点滅
するボタンを見つけたヴァンプ。

「レッドさん、そのスイッチは？点滅してますけど・・・。」

「あん？これか？これは・・・なんだっけ？ま、押してみりゃわ
かるか。」

ポチッ

バイク、そして搭乗しているレッドとヴァンプが赤い光とスパークに包まれ始める。

バチッ・・・！バチバチッ・・・！！

ピカアアアアア！！

「あれ・・・？」

「え？ち、ちよつと！？レッドさん・・・」

そして、一際激しい閃光！

ピカッ！！！！

赤い閃光が収まると・・・

二人の姿は何処にもなかった・・・。

これが運命の始まり。

交わることのなかった二つの世界。

全力を振るえない正義のヒーローと、英雄の遺児。

白き翼が太陽の加護を得た時、運命の歯車が回り始める。

プロローグ（後書き）

投稿が予想よりも遥かに恥ずかしい！！

F i g h t . 0 1 (前書き)

続けて投稿。

作成スピードがあがらない！ o r z

Fight. 01

「う．．．、うん．．．。」

倒れていた男性が目を覚ました様だ。

その男性は起き上がるとすぐさま、自身の身体に怪我がないか確認を始める。

背はかなり高く、Tシャツの上からでもはっきりと分かるほど、かなり鍛え上げられている肉体。しかし、彼を見て一番目を引くのは身体ではない。

では何処を見るのか．．．？

それは顔．．．正確には頭部である。

何故なら、特撮番組の正義のヒーローの様な完全に頭部を覆った赤いマスクであった。

彼の名は『天体戦士サンレッド』

正真正銘、正義のヒーローだった。

「ん．．．？」

レッドはすぐ近くにもう一人が倒れているのに気がついた。

「おい．．．、おい、ヴァンプ．．．。」

軽く身体を揺さぶる。

ゆさゆさ．．．

「う、うん・・・むにゃむにゃ・・・。」

なかなか起きない。

「起きろっ！埋めるぞ！コラァッ!？」

「ひいっ!? スイマセン! レッドさん!!」

怒鳴り声に、ほぼ反射のみで起き上がる男性。

古代ローマ兵の様な兜、立派な髭、紫のローブという目立つ格好のヴァンプ。

こう見えて、世界征服を企む悪の組織『フロシャイム』の幹部である。

普段は人のいい、カリスマ主夫で、天敵レッドとも（ヴァンプ曰く）良好的な敵対関係（笑）を築いている。

「さっさと起きねえからだろうが。」

「そ、そんなに怒らないでくださいよ、レッドさくん。」

「ちっ・・・、んで？怪我とかはねーのかよ・・・。」

「え・・・と、特にありませんね。」

「そーかよ・・・。」

「あの、それでレッドさん・・・?」

「あん・・・?」

「ここ、どこでしょうか・・・?」

「さーな? こっちが聞きてえよ・・・。」――――

見渡す限りの木、木、木。

しかも時間は夜。闇夜に三日月が浮かんでいる。

「ちょっと待ってろ。」

「え・・・?」

そう言うと、レッドは神経を集中させ、能力を発動させる。

『レッドイヤー』

ーレッドマスクの機能の一つ。最大半径10kmの物音を聞き分ける能力ー

「・・・ん？・・・これは・・・？」

「何が聞こえたんですか？」

「片方は女・・・？いや、子供か？もう片方は・・・獣か？それかなりデカいな。」

「ええ！？大変じゃないですか！？何落ち着いてるんですか！！その子を助けてあげないと！！！」

「んゝ、でもこの音は・・・。」

「早く！正義の味方なんですからっ！！レッドさん！！！」

「あーもー！行きゃいいんだろ、行きゃ・・・。」

レッド達の位置から少し離れた場所

レッドが察知した音源を作り出している二つの存在

・・・ギインッ！！・・・キキン！！・・・ガッ！！

小さな影と大きな影

小さな影は、月光を思わせるほど煌びやかな金髪、透き通る様な白い肌。

可愛らしく整った顔立ちも相まってアンティークな西洋人形を思わせる10歳頃の少女。

しかし、その端整な顔は現在、苛立ちによって歪んでいる。

「ええいつ！忌々しいっ！」

彼女は焦っていた……。戦闘におけるパートナーと寸断され、孤軍奮闘していたが、魔法を発動させる触媒……。魔法薬も体力も既に底を尽いている。

「こんな雑魚に手こずるとは……。！」

そう言って、肩で息をしながら相対する大きな影を睨む。

「その雑魚に苦戦しとる癖に、デカイ態度の嬢ちゃんやなあ。」

大きい影に月光が照らされる。浮かび上がるのは異形。成人男性を遥かに超える身長、筋骨隆々な巨軀、丸太の様に太い手足。しかし、何よりも異形足らしめているのは、頭部より生えている角と、大きな牙。

一鬼一

太古より闇の住人として存在している者達。

只の人間が抗うことも出来ない屈強な存在である。

そんな存在が目の前の少女に語りかける。

「堪忍やで？ワイかて嬢ちゃんみたいを手にかけるんはイヤなんや。けどな、嬢ちゃんは暴れすぎや。仲間大勢やられてもうて、見逃すっちゅーんは出来んのや。命令もあるしな。……。ホンマ堪忍な？」

そういい、少女の身の丈以上はある棍棒を振りかぶる。

少女は体力の限界でもう動けない。

ならば死を静かに受け入れようと目を閉じた。

ビュオツツ!!

棍棒の風を切る音が迫る。

ズンッ!!

重たい衝撃音。

・
・
・
・
・

・
・

「・・・？」

音はすれども、一向に痛みが来ない。
目を開くとそこには・・・

月光を反射し、闇夜を照らす赤いフルフェイスの男が

横合いから『片手』で棍棒を受け止めている。

「ふう・・・、間一髪ってどこか？」

「「なっ!？」」

新たな乱入者に鬼も少女も驚きの声をあげる。

レッドとしては少女が鬼に襲われているから横槍を入れただけであ
って、状況とかちんぷんかんぷんである。

とりあえず、デカイ方をぶん殴った。

ズンツツッ!!!

レッドの拳が鬼の腹に突き刺さった。

「が・・・あっ・・・!？」

鬼が崩れ落ちる。

そしてその巨体が粒子となって消えていく。

ボシユウウウウ・・・

「何だあ？消えちゃったぞ、オイ？」

「召喚された鬼は致命傷を与えると、その身は還されるのだ。そんな事も知らんのか？」

レッドが不思議そうにしていると、少女が答えた。

「まあいい、それよりも、見ない顔だが、ジジイの差し金か？」

「あん？ジジイ？誰のことだ？」

「ん？違うのか？」

「ああ、俺達はなんつか、あー・・・、迷子ってやつだ・・・」

――

「・・・本気で言っているのか？待て、俺『達』？仲間がいるのか？」

「・・・仲間っつか、連れっつか、まああと一人だな。おいヴ
アンプ！出てきていーぞ!!」

近くから出てきたヴァンプ。レッドからバイクを預かって待機していたのだ。

「はぁーい！もう忘れられてるかと思いましたがよー！」

「お前はともかく、バイクを忘れるかよ。」

「ヒ、ヒドイ・・・。」

「で、迷子と言ったが二人ともここがどこか知らんのだな？」

「ああ、さっぱりだ。」

「ワタシ達二人は気がついたらあっちに倒れてたんです。」

「ああ、乗ってたバイクもブツ壊れちまつてるしな・・・。」

「ふむ・・・（嘘をついてる様には見えんな・・・。）」

二人の様子を黙っていた少女が口を開く。

「わかった、この責任者の所まで案内してやろう。どの道ここでは部外者は動きづらいからな、先に会っておいた方が何かと都合がいいからな。」

少女の提案に二人は明るくなる。

「おお、悪いな。助かるわ。」

「でもお嬢ちゃんがこんな時間に一人で出歩くのはどうかと思うんです、ワタシ。」

・・・ピキッ！

「・・・ん？どうした？」

固まってしまった少女を不思議そうに見るレッド。

「どうしたの？お嬢ちゃん？」

心配そうに少女に声をかけるヴァンプ。

ぶるぶるぶる・・・

「・・・お、おい・・・？」

「だ、誰が少女かーっっ！？」

少女は地団駄を踏みながら言う。

「私は！エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル！！600年を生きる真祖の吸血鬼！闇の福音！なんだぞ！！」

いきなり怒り始めた少女・・・エヴァンジェリンに少し驚いたレツドとヴァンプ。

「お、おお。ほら、謝っとけよヴァンプ！」

「年上だったんですね・・・、無礼な態度で申し訳ありません。」
深々と頭を下げるヴァンプ。

「フ、フン！わかればいいんだ！わかれば！」

すんなり謝罪されるとは思ってなかったエヴァンジェリンの方が面食らう。

「あゝ、それじゃあエヴァンジェリン？そろそろ案内してくれねえか？」

「あ、ああ、そうだったな。すこし待て。こっちの連れとも合流したい。」

そういつて念話で己の従者に語りかける。

『茶々丸、聞こえるか茶々丸？』

数分もしないうちにエヴァンジェリンの連れがやって来た。

・・・空から。

ドドドドドド・・・！！

緑色の髪をした女の子が、足からジェット噴射しながら降りてきた。

F i g h t. 0 1 (後書き)

これより先は、マイペースに投稿していく予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0215y/>

ネギま！太陽の戦士

2011年10月29日17時04分発行